

---

# ソウルスティール！

都筑遥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ソウルステイル！

### 【Nコード】

N7553X

### 【作者名】

都筑遥

### 【あらすじ】

魔界随一の大帝國・ハインシユベルクの魔王直系第二子に生まれながらある理由によりソウルには王位継承権が存在しなかった。それでも特に何不自由なく暮らしていたソウルへとある日凶報がもたらされる。従姉ルクエールによる第一王位継承権篡奪だ。元老院より第一王位継承権の承認を得たルクエールはソウルへと宣告を下す。

「私はお前を愛人にするわ」

己の身と誇りを守るため、ソウルは諦めていた王位篡奪へと乗り出

した！

そんなあらすじですがノリは軽いです。

## プロローグ

「ソウル」

「何だ、ルクエール」

女の声に呼び止められ、ピクリと肩を震わせた後若干嫌そうにソウルは足を止めて振り返った。その視線を受け止めふふんとルクエールは髪を掻き上げ傲然と笑う。

「今さつき、正式に元老のジジイどもから要請されたわ。次の王は私よ、ソウル」

「だったら何だ。俺には関係ない」

溜め息をついてソウルは面倒そうにルクエールの隣をすり抜け立ち去ろうとした。付き合っただけ楽しい話でもない。

「関係無くないわよ」

「俺を追放でもするか？」

目を細めふんとソウルは鼻で笑う。有り得ない事だったからだ。例えルクエールが王になってソウルの追放を望んだとしても何もなければ周りがそれを許すまい。ソウルは自他共に認める天才だからだ。あらゆる分野において。

「まさか。私がお前を追放なんてするはずないでしょう？」

「ハッ。言っとくが俺様はお前の治世に手を貸すつもりは無いぞ。

何でも勝手にすればいい。俺を巻き込むな」

「ふっ。相変わらず強気なのね」

「当然だ。俺様に恐れるものなど何もない」

腕を組み、にやりと凶悪に笑って威嚇するようにルクエールを見上げるが、相手はその目を捕えて嫣然と微笑<sup>えんぜん</sup>って見下ろして来た。

（ ？ ）

何かが違う、とソウルの中で警鐘が鳴った。

「ソウル」

「……何だ」

「私はお前を愛人にするわ」

「……………。は？」

何の聞き間違いだ？

「お前の血を王家に残す気は無いけれど、私はお前を気に入ってるわ。安心なさい。夫にはしないけれど私が一番可愛がるのはお前よ、ソウル」

すいとそのまま屈み込むと、啞然としたソウルにそのまま口付けた。

柔らかい女性の唇が離れて、数秒。フリーズしていたソウルにようやく再起動が掛かる。

「なっ、なっ、何しやがんだア　ッ！」

女に。女からキスされた。

ファーストキスは絶対相手に目を瞑ってもらって自分が上から唇と落としたかったのにッ。

「貴様アツ！　この屈辱、忘れんぞっ！」

涙目になって怒鳴るソウルにやだ可愛い、とか言ってるルクエールはぎゅうとその体を抱きしめた。

ソールステイリツヒ・バルⅡアク・ハインシュベルク千と二百六十六歳。

この日生まれて初めて、諦めていた王位篡奪の野心に火を付けた。

## 第一章 欠落王子と欠落魔術師

「つがアアアア！ 今思い出してもはらわたが煮えくりかえるわー  
っ！」

「それはソウルが隙あり過ぎなんだろーな」

この日何度目かのソウルの絶叫に、パリパリとスナック菓子を食べながら律義にソウルの異母兄であるラーは同じ相槌を繰り返した。いや、同じセリフを繰り返しているだけなので律義とは言えないか。明るい金髪と赤い瞳、顔立ちは若干きついが申し分のない美形で、絶対将来追いこしてやると誓う程度には背も高い。怠けて殆ど動かないくせにスタイルは一向に崩れないのだ。

今年で七千を数える異母兄ラーとは対照的に、ソウルの色彩は若干鈍い。灰銀の髪と研がれた鉄色の瞳。人の体年齢で言えば十一、二程の幼体なので歴然たるラーとの差がちよつと悔しい。

「貴様アツ！ 大っ体貴様それでいいのか！ 王の直系は貴様なのだぞー！！」

「ああ、別にどうでもいい。めんどい」

「『面倒』まで平仮名にするな余計気が抜けるわ！」

「っーか人の部屋来てどうなんだお前」

怒鳴り散らすわ部屋の主に文句付けるわ。

面倒そうに呟いた後、次のセリフはやはり。

「まア別にいいけどな」

大体の事にやる気が無いのでそこに落ち着く。こいつに沸点というものはあるのかと思う程にラーが感情を動かす事そのものがあり無い。

「貴様が真っ当に王位継承権を守っていればこんな事にはならんか  
つたんだ！」

「人に頼るなよ。お前だって直系だろ、一応」

「判っておるわ！」

イライラとソウルはラーに怒鳴り返した。

ソウルとラーの父は現在の魔王だが、ソウルには王位継承権が生まれた時から存在しなかった。

理由は、ソウルが人間とのハーフだから。

別にそれはそれで構わなかった。判らなくはなかったし、反発する者を抑えてまで王になりたい訳でもなかったのだ。

しかし……

「何が嫌なんだ？ ルクエールはいい女だろ」

「俺の好みじゃない。大体愛人だぞッ！ 愛人！」

「気楽でいいんじゃないか」

「いい事あるかア！ お前は言われりゃ頷くのかッ!？」

「頷かねエな。女の機嫌取んなアめんどい。勝手に乗るなら構わね

……いややっぱ嫌だな。ダルいし」

「どんだけヤル気無いんだ貴様……」

食べ終わったスナック菓子の袋を潰してポイとゴミ箱に投げ捨てると、のそりとラーは起き上がる。

「で、どうするんだ？ 逃げる手伝いでもして欲しいのか？ しねえけど」

「たわけ。ここまでコケにされて引き下がれるか。俺がルクエールから王位継承権を奪ってやるのだ」

「へえ？」

すいと目が細められ、初めてラーは感情を微かにではあるが動かした。楽しそうな笑みがその唇に浮かんでいる。

「お前が？ 本気で？」

「当然だ！」

「それを言いに来たのか？」

「そつだ。どうする？」

いかにヤル気のないラーとは言え、やはりハーフの自分が王位を継ぐのは気にくわないかもしれない。

(それならそれで構わん。それでも俺の意思は変わらんからな！)

これからを思うと少し鈍い痛みを覚えるが、どうせ避けて通れない道。ここではつきりさせておきたい。

「言ってるだろ、面倒くさい。とにかくどうでもいいから俺を巻き込むな」

「関わらんならそれでいい」

「……本気で一人でやる気か？」

「勿論だ」

ソウルにも勿論お付きの部下は何人もいる。しかし王位を狙うとなると信用できたものじゃない。

「出来りゃ面白いとは思っけどな。一応言っついてやる、止めとけ。お前を良く思わない奴は多い」

「知っているとも」

人間とのハーフであるソウルが王子として何不自由なく暮らせているのは王がソウルを息子として認めているのと、ソウル自身の才そして何より 害にならなかったからだ。

「だからどうした。別に誰に気を使っていた訳でもない。俺に必要ならば奪い取るまでだ！」

「ふうん。ま、頑張れ」

「……」

「どうした？ 用は済んだろ。俺は寝る」

「眠れば良いだろうが」

「……」

別にソウルが居て眠るのに邪魔という事は無い。というかラーに他人を気にするような可愛い神経は無い。だが。

「……怖いのか」

「なっ、何をっ！」

「ソウル！」

ばん、と遠慮も何も無くラーの部屋の扉が開かれルクエールが入ってきた。瞬間ソウルは明らかに『げっ』という顔をして身を引く。ラーは変わらぬ抑揚の無い眼で扉の方を見た。



「やっぱりここだったわね」

「つーかお前！　ここはラーの部屋だぞ！」

「それが何？　今王の次の地位にあるのはこの私よ」

「ぐっ……」

今までは王の次に地位が高かったのは第二妃とはいえ本来ならば王妃に相応しい地位を持つシユツイルオーレを母に持つラーだった。今までずっとラーは血筋と能力の高さから次期魔王と期待されていたが、あまりのやる気の無さについて元老院も諦めルクエールで妥協したのだ。

前々からソウルはルクエールにちよつかいをかけられる度、よくよくラーの部屋を利用していた。勿論ルクエールもそれは知っている。だが王の姪とはいえ直系第一子のラーの部屋まで踏み込む事は出来なかったのだ。

ルクエールは既にラーから王位継承権を奪い取る事を決めていたの  
で下手にラーの不興を買って邪魔をされては困る。そうしたら自分が不利　というよりも絶対的に無理なのはよく判っていたので。

もともとラー本人はルクエールが入って来た所で気にしなかっただ  
ろうし、それが判っているからルクエールもこうして今は踏み込む  
心積もりが出来た訳だが。

「な、何の用だ」

「何の用も何も、お前は私のものなんだから私の側が定位置なのよ」  
「勝手に決めんな！」

くすくすと綺麗な顔で微笑まれてもソウルの肌には鳥肌しかた  
ない。美人かどうかはこの際関係無い。自分の意思の介在しない物  
事がとかくソウルは嫌いなのだ。

「ふ、ふん！　まあ丁度良かった！　ルクエール、貴様に言ってお  
く事がある！」

「あら、何？」

「貴様の愛人など真つ平ごめんだ！　貴様の持つ王位継承権、この  
俺様が奪ってやるから覚悟しておけ！」

ソウルのセリフを聞き終えた後、きよとんとルクエールは静止して、それから弾かれたように笑い出した。

「お前が？ 王位を？ ふふふつ、中々面白い冗談だわ」

「誰が冗談など言つとるか！」

「本気なの？」

小馬鹿にしたように笑い続けていたルクエールがピタリと笑いを止めてソウルを見据える。覚悟を決めて王位を奪った女傑の眼で。

「無論本気だ！」

「諦めの悪い子ね。まあいいわ。お前のそういう所も結構好きよ。従順なだけじゃつまらないものね？」

ペロリと唇を舐めてルクエールは毒々しく笑う。

「陛下の血を継いでいるとはいえ半端なお前がどうやってジジイどもに納得させるのか……楽しみにしているわ」

「ふん！ その余裕にスカしたツラ、すぐに吠え面に変えてやるわ！！！」

腕を組み、自信たっぷりと言い放つ。何も考えちゃいなかったが人生ハツタリも必要である。

「まあそれはそれとして」

「っ？」

毒々しい笑いを引つ込めて、今度は熱の入った視線をルクエールはソウルへと向けた。

「お前が私から継承権を奪うまではやはり私の方が立場は上なのだから、大人しく相手をなさい、ソウル！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7553x/>

---

ソウルスティール！

2011年10月21日10時02分発行